



## 「妖しの世界」へようこそ

近頃、幼児の間で大人気なものに「妖怪ウォッチ」があります。昔は妖怪とかお化けは恐怖の対象で、聞き分けのない子供を大人しくさせるために大人が便利にその名を口にしていましたが、今は子供たちの友達の存在と化しているようです。

ただ、今回の展示を見てもらえばわかりますように、江戸時代には驚くほど豊かな「妖怪文化」が花開き、人々は妖怪に対してユーモラスな親近感を抱いていました。歌舞伎は妖怪の存在なしに成立しないと言ってもいいかもしれません。

明治維新が急いだ「近代化」のせいで、妖怪たちは一時、闇の中に姿を隠しました。しかし、そこは妖怪、慌てず騒がず、世間話などでのんびり暇つぶししながら、次なる出番を待っていたようです。ですから、「近代化」の果ての戦争が終わり、水木しげるさんに招待され、彼らは喜んで戻ってきました。そして私たちは彼らの魅力を再発見したわけです。

とはいえ、先に申し上げましたように、水木さんのはるか前から私たちは厚みのある「妖怪文化」を持っています。今回の展示を通して、その一端に触れ、妖怪たちの声に耳を傾けていただきたいと思います。もともと妖怪は、人間の力ではどうにもならない恐ろしいもの、病気や死や荒ぶる大自然と人間との対話から生まれたものです。地球の未来、人類の未来を考えると、彼らは思いもかけない何かを私たちに教えてくれるのではないのでしょうか。

ちょっと怖いけれど、ワクワクさせる彼らの世界をどうぞご堪能ください。

専修大学図書館長 坂野 明子



## 展示にあたって

夏に怪談はつきものですが、春の図書館で江戸の妖怪見物はいかがでしょうか。本展示では、「春にやってきた江戸の妖怪大集合 一向井信夫文庫を中心に」と題して、江戸を中心に広く大衆に親しまれてきた妖怪の世界へご案内します。

恒例となった4月開催の企画展には、新入生歓迎の意味が込められています。図書館を身近に感じていただくとともに、普段目に触れることのない書物を通して皆さんの「知りたい」のきっかけとなれば嬉しく思います。また、ご来場の地域住民をはじめ愛好の皆様には、江戸期の豊かな出版文化のもとに生まれ、洗練を極めた和本の数々を通じて、それを生み出し、享受した人々にも思いを馳せながら、妖怪のいきいきと活躍する姿をお楽しみ頂きたいと思います。

**妖怪とのお付き合い** 近頃、巷では「妖怪のせいだ」という言葉が流行っているようですが、江戸時代以前からも、人々は不可解な現象を「妖怪のせいだ」と捉え直してきました。覚えのない傷が身体に出来たときは「かまいたちのせいだ」、晴れているのに雨が降ったときは「狐の嫁入りのせいだ」という調子で、それらを闇雲に恐れるのではなく、納得できる形にしてきたのです。やがて江戸時代の後期になると、妖怪たちは娯楽の対象となり、様々な物語の中に生み出されていきます。そして近代を経て現代、私たちにとって「妖怪」とはどのような意味をもつのでしょうか。

**展示の構成** 本展示では、「妖怪図鑑」「動物の化け物」「語り継がれる怪談」「妖怪でパロディ」「絵で見る異形のもの」「愛された妖術使い」の6つの章に分け、江戸の庶民生活の中で愛された様々な妖怪たちを紹介します。江戸時代における妖怪画の先駆けともされる『画図百鬼夜行』から、江戸末期に流行した妖術使いが活躍する合巻（草双紙）まで、江戸時代の妖怪を大まかになぞれるように資料を選定しました。展示の最後部では、妖怪に関する現代の文献を紹介します。数多くの妖怪漫画を遺した漫画家・水木しげるの作品を中心に、現代の作家・研究者の妖怪へのまなざしを感じ取って頂ければと思います。

展示会場の各所には、展示作品や江戸文化にまつわるコラムを設けました。作品の鑑賞や今後の「知りたい」の一助となれば幸いです。コラムでは、板坂則子文学部教授に一部執筆のご協力を頂きました。



# 見どころと展示作品

## 第1章 妖怪図鑑

はじめにご覧頂くのは、ストーリー仕立てではなく、妖怪の図像と名前が列挙されている、まさに「図鑑」ともいえるべき作品です。江戸時代、博物学の隆盛もあって様々な怪異は固有の名と姿を与えられ、「妖怪」として生み出されていきました。その流れで出版された『画図百鬼夜行』シリーズ (No. 1~4) は、妖怪絵本の先駆けとして当時の妖怪図像の規範となり、後世の作家たちに多大な影響を与えました。魔を恐れる心とそれを楽しむ精神とがないまぜになった妖怪画は、独特の雰囲気醸し出しています。あわせて展示した『絵本百物語』(No. 5) は、『画図百鬼夜行』シリーズを踏まえた作品と言われ、多色刷りで妖怪の姿が生き生きと描かれているのが特徴です。

1. が ず ひやつきやぎょう 画図百鬼夜行／鳥山石燕作・画, 出雲寺和泉掾ほか板, 安永五年 (1776), 三巻三冊, 絵本
2. こんじゃくが ずぞくひやつき 今昔画図続百鬼／鳥山石燕作・画, 板元不明, 安永七年 (1778) 序, 三巻(存二巻)二冊, 絵本
3. ひやつきやぎようしゅうい 百鬼夜行拾遺／鳥山石燕作・画, 板元不明, 安永十年 (1781) 序, 三巻(存二巻)二冊, 絵本
4. ひやつきつれづれぶくろ 百器徒然袋／鳥山石燕作・画, 前川弥兵衛ほか板, 天明四年 (1784), 三巻一冊, 絵本
5. えほんひやくものがたり 絵本百物語／桃花園三千麿作, 竹原春泉斎画, 金花堂板, [天保十二年 (1841)], 五巻五冊, 絵本

## 第2章 動物の化け物

動物の化け物と言えれば何を思い浮かべるでしょうか? やはり人に「化ける」動物を思い浮かべるのではないのでしょうか。日本の昔話には、動物が人に化ける話や、逆に人が動物に化ける話が数多くあります。人間に化ける動物たちは、恩に報いるためであったり、悪事を働くためであったり、善悪を問わず様々な意図をもっています。今回は、美女に化ける金毛九尾の狐「玉藻前」をはじめとする妖狐の物語 (No. 6~9) を中心に、人に害をなす不気味な動物の妖怪たちを集めました。章の最後に紹介する『花裘狐草紙』(No. 16) は、狸と共にユーモラスな化け姿を見せてくれます。工夫を凝らした愛らしい装訂にもご注目下さい。

6. えほんたまもものがたり 絵本玉藻譚／岡田玉山作・画, 須原屋茂兵衛ほか板, 文化二年(1805) [跋], 五巻五冊, 読本
7. いとぐるまきゅうびのきつね 糸車九尾狐／山東京伝作, 歌川豊国画, 永寿堂西村屋与八板, 文化五年 (1808), 三編九巻一冊, 合巻
8. せつしょうせきごにちのかいだん 殺生石後日怪談／曲亭馬琴作, 歌川豊国他画, 山口屋藤兵衛板, 文政八年 (1825) ~天保四年 (1833), 五編十四巻十二冊, 合巻
9. すわのうみきつねかいだん 諏訪湖狐怪談／十返舎一九作, 勝川春亭画, 板元不明, [文化四年 (1807)] 序, 二編十巻 (存二編七巻) 一冊, 合巻
10. かたきうちふたまたづか 復讐両戻塚／式亭三馬作, 勝川春亭画, 岩戸屋喜三郎板, 文化五年(1808), 二編六巻一冊, 合巻
11. ねこまたばげしょうやしき 金花猫婆化生舗／歌川貞秀作・画, 鶴屋喜右衛門板, [天保九年(1838)], 三編六巻一冊, 合巻

12. かいだんねこのよめいり 怪談 猫嫁入／十返舎一九作・画，[山本平吉板]，文政二年（1819），二卷一冊，合卷
13. しっぺいたろう 竹篋太郎／栗杖亭鬼卯作，前川源七郎板，[文化六年(1809)序]，五卷五冊，読本
14. らいごうあじやりかいそでん 頼豪阿闍梨恠鼠伝／曲亭馬琴作，葛飾北斎画，僊鶴堂鶴屋喜右衛門板，文化五年（1808），二編八卷十冊，読本
15. かいえんきだん 蟹猿奇談／栗杖亭鬼卯作，浅山蘆国画，秋田屋太右衛門ほか板，文化四年(1807)，五卷五冊，読本
16. はなごろもきつねのそうし 花裘 狐草紙／仮名垣魯文作，歌川芳虎画，錦橋堂山田屋庄次郎板、文久二年（1862）～文久三年（1863），三編十二卷三冊，合卷

### 第3章 語り継がれる怪談

現代でも夏の風物詩となっている怪談。実は、江戸時代の人々にも愛されていたのです。特に江戸後期においては、演劇（歌舞伎・落語など）・絵画（浮世絵など）・文学（草双紙など）が互いに影響し合い、「怪談文化」とも言うべき怪奇趣味的な文化が大衆の中で流行しました。本章では、「四谷怪談」(N. 17～19)や「牡丹燈籠」(No. 23)など、現代でも語られる怪談を中心に紹介します。『御家の化物』(No. 24)や『怪談木幡小平次』(No. 25)は歌舞伎で上演され、好評を博したことから、のちに草双紙（合巻）として出版された作品です。読み物としてだけでなく、歌舞伎や落語など様々なメディアで享受された怪談の豊かな世界をお楽しみ下さい。

17. しもよのほし 霜夜星／柳亭種彦作，葛飾北斎画，河内屋太助ほか板，文化五年（1808），五卷五冊，読本
18. とうかいどうちゅうかどでのさきがけ よつ やかいだん 東街道中門出之 魁 四ッ家怪談／尾上梅幸作，[花笠文京代作]，溪斎英泉画，若林堂若狭屋与市板，文政九年（1826），二編六卷一冊，合巻
19. とうかいどうよつやかいだん 東海道四谷怪談／瀬川如臯三世作，歌川国貞二世画，葛谷吉蔵板，万延二年（1861），三編十二卷五冊，合巻
20. かたきうちばんしゅうさらやしき 酬寇播州皿屋敷／徳永素秋作，歌川豊広画，板元不明，[享和三年（1803）]，三卷一冊，黄表紙
21. さらやしきうきなそのめつけ 皿屋敷浮名染著／曲亭馬琴作，鳥居清峯画，[鶴屋喜右衛門板]，文化十一年（1814），二編六卷二冊，合巻
22. しんかきねげだつものがたり 新累解脱物語／曲亭馬琴作，葛飾北斎画，菱屋孫兵衛ほか板，文化四年(1807)，五卷五冊，読本
23. かぶきのはなぼたんどうろう 戯場花牡丹燈籠／山東京伝作。歌川国貞画，岩戸屋喜三郎板，文化七年（1810），二編六卷二冊合巻
24. おいえ ばけもの 御家の化物／尾上梅幸三世作，林屋正蔵校，歌川貞秀画，永寿堂西村屋与八板，天保十年(1839)，四卷一冊，合巻
25. かいだんこはだこへいじ 怪談木幡小平次／並木五瓶三世作，歌川国貞二世画，[葛谷吉蔵板]，[嘉永六年（1853）]，三編十二卷一冊，合巻

## 第4章 妖怪でパロディ

日本の文化の特徴を語る上でパロディは欠かせませんが、それが顕著に現れたのは江戸時代だと言えるでしょう。江戸時代にパロディ文化が花開いた要因のひとつに、出版活動が盛んになり、教養が大衆化されたことが挙げられます。パロディが理解されるには、それが何の模倣なのかが読者に共有されていなければならないからです。『化物太平記』(No. 27)は『絵本太閤記』を、『化皮太鼓伝』(No. 28)は『水滸伝』を、それぞれもじっています。「化物」と「太鼓」からは「ドロドロ・・・」という音の響き、歌舞伎における化け物の出入りの太鼓連打が連想されます。ただ面白いだけでない、スパイスの効いた江戸の笑いを感じ取って下さい。

26. かいだんももんじい 怪談模模夢字彙／山東京伝作, 北尾重政画, 板元不明, 享和三年(1803), 三巻一冊, 黄表紙
27. ばけものたいへいき 化物太平記／十返舎一九作・画, 山口屋忠助板, 享和四年(1804)序, 三巻一冊, 黄表紙
28. ばけのかわたいこでん 化皮太鼓伝／十返舎一九作, 歌川国芳画, [山口屋藤兵衛板], 天保四年(1833), 六巻二冊, 合巻

## 第5章 絵で見る異形のもの

「箱根からこっちに野暮と化け物はいない」とは、江戸の人々の粋と進んだ文化に対するプライドを表した言葉です。この言葉から、箱根よりも向こう側には「化け物」がいるとされていたことが分かります。それが18世紀後半には、江戸という都市に住む人々にとって、妖怪とは、リアリティの中の存在ではなくフィクションの世界の存在、あるいは、信仰の対象ではなく娯楽の対象になっていきました。この章では、箱根の向こう側の化け物たち(No. 29・33)、虫の妖怪(No. 30)、天狗(No. 31)、骸骨(No. 35)、その他おなじみの妖怪も含め、多種多様な異形のもので登場する書物を集めてみました。にぎやかな妖怪の世界をお楽しみ下さい。

29. ばけくらべはこねかぶき 怪化競箱根戯場／楽亭馬笑作, 歌川豊国画, [森屋治兵衛板], [寛政八年(1796)], 三巻(存九～十五丁)一冊, 黄表紙
30. まつとうめたけとりものがたり 松梅竹取談／山東京伝作, 歌川国貞画, 西村屋与八板, 文化六年(1809), 二編十五巻(存一編九巻)一冊, 合巻
31. おにがこじま めいよのあだうち 鬼 児島名誉仇討／式亭三馬作, 歌川国貞画, 春松軒西宮新六板, 文化五年(1808), 二編八巻一冊, 合巻
32. ひやくものがたりちようじやのまんどう 百物語 長者万燈／曲亭馬琴作, 勝川春亭画, 岩戸屋喜三郎板, 文化十四年(1817), 六巻一冊, 合巻
33. ここんばけものひょうばん 古今化物評判／烏亭焉馬作, 歌川国貞画, 永寿堂板, [文化十一年(1814)], 五巻(存三巻)一冊, 合巻
34. だいじだいからのばけもの 大時代唐土化物／振鷺亭作, 勝川春亭画, 丁字屋平兵衛板, [文化十三年(1816)], 三巻一冊, 合巻
35. かいだんはらつづみ 怪談波良鼓／五柳亭徳升作, 歌川国芳画, 山口屋藤兵衛板, 文政十三年(1830), 六巻一冊, 合巻

## 第6章 愛された妖術使い

この章では、江戸末期に人気を博した妖術使いたちを紹介します。1人目は、がまの妖術使いの「児雷也」(No. 36)。大蛇の腹から生まれた盗賊・大蛇丸と、なめくじの術を使う女傑・綱手との三すくみの中で、児雷也の活躍が描かれます。2人目は、不気味な蜘蛛を操るヒロイン「若菜姫」(No. 37)。大友宗麟の遺児である若菜姫は、御家再興のため、蜘蛛の妖術を使って復讐劇を繰り広げます。3人目は、蝶に乗る美少年「藤浪由緑之丞」(No. 38)。歌舞伎「鏡山物」に登場する岩藤の孫で、蝶を操って祖母の敵討ちに挑みます。いずれの作品も好評を得て、著者や絵師が入れ替わりながら100巻以上も刊行されました。美しい装訂で彩った江戸末期の合巻、そして江戸時代の人々が夢中になった妖術使いの物語をのぞいてみて下さい。

36. じらいやごうけつものがたり 児雷也豪傑譚／美図垣笑顔ほか作, 歌川国貞ほか画, 和泉屋市兵衛板、天保十年(1839)～明治元年(1868), 四十三編百七十二巻(存四十二編百六十八巻) 四十二冊, 合巻
37. しらぬいものがたり 白縫譚／柳下亭種員ほか作, 歌川国貞ほか画, 松林堂藤岡屋慶治郎板, 嘉永二年(1849)～明治十八年(1885), 九十編(存六十編二百四十巻) 五十一冊, 合巻
38. じだいかがみ 時代加々見／為永春笑ほか作, 歌川国貞二世ほか画, 若林堂若狭屋与市板, 嘉永八年(1855)～明治十六年(1883) 四十八編百九十二巻(存四十七編, 八十八巻) 三十二冊, 合巻

## 第7章 現代の妖術使いたち —水木しげるを中心に—

最終章では現代に目を転じ、2015年に逝去した水木しげるの作品を中心に、漫画家、小説家、研究者という「現代の妖術使い」の著作を並べました。水木しげるは、妖怪に興味を持った幼少時代、戦争で左腕を失い死と隣り合わせになった青年時代を経て、『ゲゲゲの鬼太郎』などの妖怪漫画を生み出してきました。この章では、水木の作品の他に京極夏彦やアダム・カバットなどの著作を通じて、見えない妖怪に対する作者のまなざしを感じ取って頂ければと思います。江戸期和本の妖怪画とあわせてお楽しみ頂けるよう、お手にとって閲覧できる形にしました。ぜひページをめくり、「現代の妖術使い」の手によって生まれ変わった妖怪の姿をご覧下さい。

39. 永井龍男ほか『特集 お化けと幽霊』平凡社、1975.7(『太陽』No.147)
40. 水木しげる『水木しげるの妖怪地図 —47都道府県ご当地妖怪を訪ねる—』平凡社、2011.7(『太陽』別冊;「太陽の地図帳」008)
41. 水木しげる『妖怪画談』正・続、岩波書店、1992～1993(岩波新書新赤版238・287)
42. 水木しげる『カラー版 幽霊画談』岩波書店、1994(岩波新書新赤版341)
43. 水木しげる『水木しげるの憑物百怪』上・下、小学館、2005(小学館文庫)
44. 水木しげる・村上健司『水木しげるの日本妖怪紀行』新潮社、2006(新潮文庫)
45. 水木しげる『日本妖怪大全 —妖怪・あの世・神様—』講談社、2014(講談社文庫)

46. 京極夏彦『姑獲鳥（うぶめ）の夏』講談社、1998（講談社文庫）
47. 京極夏彦『京極夏彦画文集 百怪図譜』講談社、2007
48. 京極夏彦『定本 百鬼夜行』陰・陽、文芸春秋、2012
49. アダム・カバット（Adam Kabat）校注・編『江戸化物草紙』小学館、1999
50. アダム・カバット校注・編『大江戸化物細見』小学館、2000
51. アダム・カバット『大江戸化物図譜』小学館、2000

## 参考文献

稲田篤信他編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』（国書刊行会、1992）、多田克己編『竹原春泉 絵本百物語』（国書刊行会、1997）、香川雅信『江戸の妖怪革命』（河出書房新社、2005）、中村禎里『日本人の動物観』（海鳴社、1984）、横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房、1997）、小島康敬『『性』と『聖』とを繋ぐ笑い』（ツベタナ・クリステワ編『パロディと日本文化』笠間書院、2014）、佐藤至子『妖術使いの物語』（国書刊行会、2009）

## 向井信夫文庫について

向井信夫文庫は、戯作に関する広範かつ深奥な学識をもつ故向井信夫氏が、半生をかけて蒐集された戯作コレクションです。戯作とは、江戸後期に出された小説版本類の総称で、江戸を中心に広く大衆に愛され、出版文化メディアの中で育まれました。現代の漫画やアニメーションなどのサブカルチャー作品は戯作に源を発しています。

本文庫は、草双紙と読本を中心として、滑稽本、人情本、洒落本等の江戸期和本4,090作（10,346冊）、及び一般書4,578冊、雑誌21誌から成ります。戯作は本文と浮世絵師による挿絵の双方が共存する大衆向けの小説群で、本学所蔵の草双紙は国内有数のコレクションとして知られています。対して読本は、本格小説を標榜するもので、本学には、江戸を代表するほとんどの戯作者の作品があまねく収められています。

本コレクションは、2009年に向井家から本学図書館に移譲され、以後、学内外で開催の展示会では、数々の作品を多様な切り口で紹介。また、広く研究者や愛好家、メディア関係の利用に供されています。

専修大学図書館企画展 春にやってきた妖怪大集合 一向井信夫文庫を中心に

発行日 平成28年4月1日

編集・発行 専修大学図書館 図書館長 坂野明子

専修大学図書館 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1  
Tel. 044-911-1274  
E-mail library@acc.senshu-u.ac.jp